

## 10 【がしゃどくろ】

またやはり、うららかな春の、午後の話。

村の大人たちが、役場の前に集まって、口々に、

「かい爺が躑躅峠（つつじとうげ）で、野たれ死にしているぞい」という。

それなら、遺体を引きとりにいけばいいのに、誰も動こうとはしない。

喜んでいる者はいないが、悲しんでいる者もない。

「そのままにしておくと、山犬や大鴉（おおがらす）にくわれて、【がしゃどくろ】になっちまうで」

なんていう者もいたし、

「【がしゃどくろ】になられたら、村の一大事だのう。村長が死ぬよりてえへんだ」

なんていう者もいたし、

「【がしゃどくろ】になる前に、骨まで焼いてしまわんと」

なんていう者もいたけれど、やはり誰も動かない。

どうせ、近づいて、呼吸や脈を、たしかめているはずがない。

だからぼくは、死んでいるとはかぎらないとおもったので、母親に作ってもらった、おにぎりとお水を持って躑躅峠まで走りました。

峠の入口で、髑髏（されこうべ）をみました。

これが【がしゃどくろ】か、とおもいました。

懐爺が【がしゃどくろ】になったのか、とかんがえると、それほどこわくはなかったものです。

【がしゃどくろ】に、

「かいじい」

と、よびかけました。

すると、衣擦（きぬずれ）に似た音といっしょに、髑髏の黒い大きな目から、赤黒い蝮（まむし）が、つぎつぎに顔をのぞかせたのです。

その様子は、ところてんをおもわせました。

ところてんは、もう一生くえない気がしました。

さすがに気味が悪くなって、おもわず髑髏を蝮といっしょに、おもいきりけとばしていました。

「かいじい、かいじい」

ぼくは大声をあげながら、髑髏が転がっていった、紅躑躅がしげる山道をさがしました。

躑躅のかけに、本物の懐爺がたおれていました。

ぼくの声によって、懐爺は半身を起こしました。

懐爺の顔は、蹙（やつ）れて髑髏に近い。

ぼくは、おにぎりとお水を、懐爺にあげました。

「よかったのう。しんどらんのう」

ぼくは安心しました。

号泣（ごうきゅう）もしました。

それからこんどは、歓喜（かんき）の大声をあげました。

「金ちゃんがうるさいから、生きかえりましたよ」

懐爺は、おにぎりをほおぼりながら、照れ臭そうに笑いました。

「【がしゃどくろ】にやられたんか。それとも【がしゃどくろ】になったんか」

「どっちでもありませんよ。【がしゃどくろ】は金ちゃんにけとばされて、消えてしまったようです。わたしは【かまいたち】にやられたんです」

「いたちの、へくされに、やられたんか」

「【かまいたち】は魑（いたち）の鎌（かま）という話もありますが、これはいわば風のいたずらで、あるいは帯状疱疹（たいじょうほうしん）か。誰に切られたわけでもないのに、気がつくとき切り傷ができているんです。いずれにしても、【かまいたち】もおぼけの仲間でしょうね。いたちの屁のほうがましです」

懐爺が、身にまとった襤褸（ぼろ）をめくると、そこかしこに切り傷があって、そのうちの一カ所からは、まだ躑躅色の血がにじみでている。

「いたいじゃろ」

ぼくは、自分の唾（つば）をなすりつけました。

「出血多量（しゅっけつたりょう）で、貧血（ひんけつ）をおこしたんですよ。わたしは痛みなんかかんじない人間ですから、ご心配なく」

懐爺の笑顔をみつめながら、ぼくは、懐爺が死ななくて本当に良かったとおもいました。

まちがいなく、そのころのぼくは、懐爺が死ぬことは、自分が死ぬこ

とよりも、いやなものでした。

そうそう、いまだから感じることなのですが、〈躑躅〉の漢字と〈髑髏〉の漢字は、どうしてこんなに似ているのでしょうか。